

**Kodak**

LICENSED PRODUCT

Black

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000

White 3/Color

Magenta

Red

Yellow

Cyan

Green

Blue

Yellow

Yellow

Green

Blue

Cyan

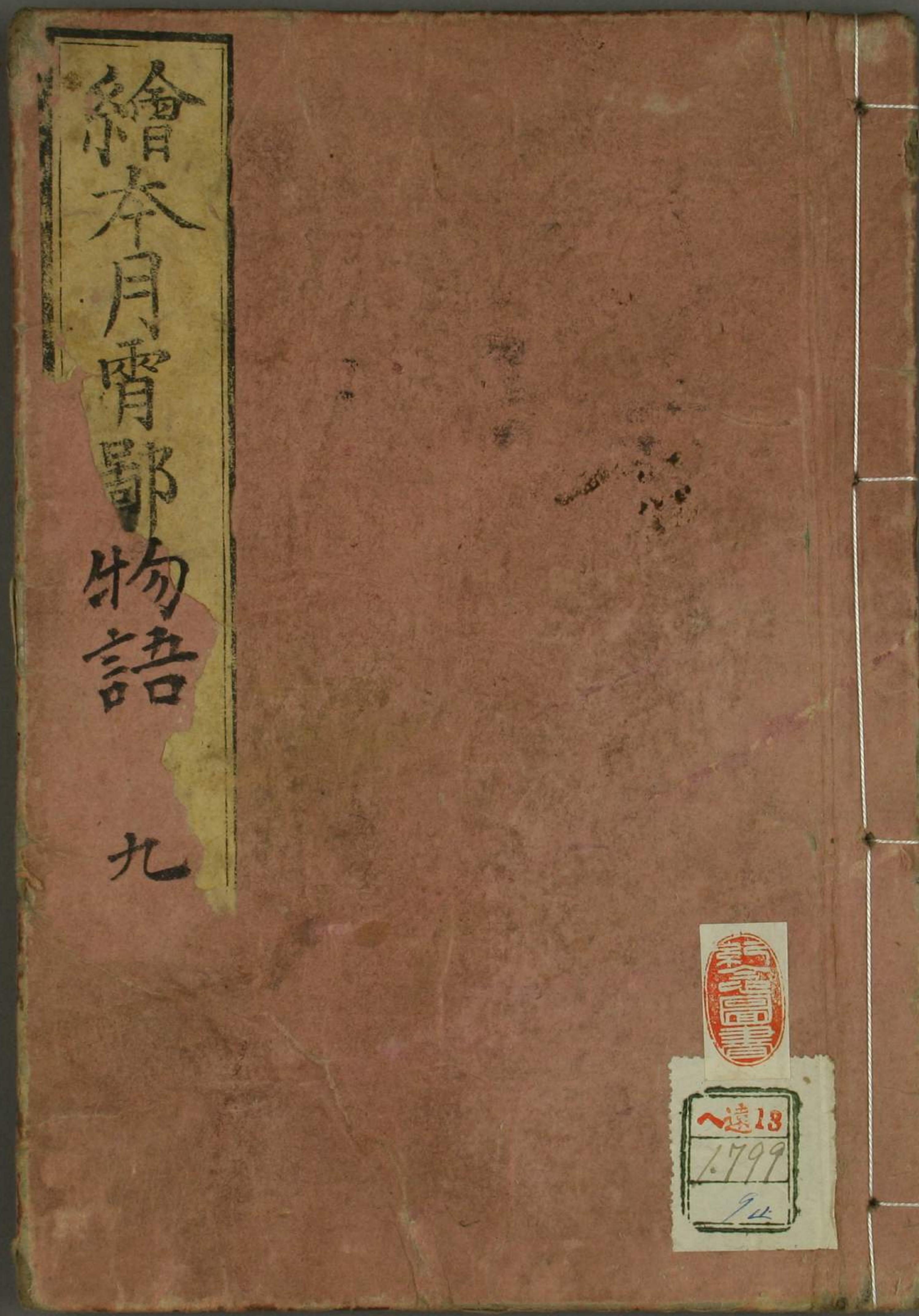
Red

Magenta

White

3/Color

Black



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3

JAPAN

TAMIA

月 ~遠 13  
1799

# 書道研究

七  
明  
登

# 明鑒

A vertical calligraphy piece in Chinese ink on light-colored paper. The characters are written in a bold, expressive cursive style. The main text reads '秋水共長天一色' (The autumn water merges with the long sky, one color). To the left, there is a smaller inscription: '王漁洋書于京師' (Written by Wang Yuyang in the capital).

This vertical scroll of Chinese calligraphy, written in cursive script (caoshu), consists of three main columns of characters. The first column on the left contains the characters '者' (zhě) at the top and '向' (xiàng) at the bottom. The middle column contains '相' (xiāng) at the top and '明' (míng) at the bottom. The third column on the right contains '向' (xiàng) at the top and '明' (míng) at the bottom. The entire composition is set against a background of traditional ink-wash paintings depicting trees, blossoms, and foliage. The characters are bold and expressive, with varying line thicknesses and ink saturation.

つらうよひうりがくそん  
月 十一月  
百物語後言 卷第四  
りとこうやく くろく  
本鳥山の黒髪

桃華園

まよひ  
外あくまゆでいとまの暮年寒きがれの上うつりをひて  
戸構完かゞぎるすみれにて樂へ紙あゝたえむ牛ふとみにて生應  
對りよの賢者へ更にいよすの脣人金す利欲すくさる者へどく  
く貪はて裏ぬる者へまもす其故、くふとくま金根す物ハせの義  
理をほくろへあの窮はて義をかき遂す背そむきあつたくし難ひ  
小へあゝがるあづまわん古人の因より宝ぬる者ハからざりどんじやく  
して懽貪邪見より懽貪邪見はあゝがほくらひ家とあくびまむ  
とりうれきばげ玄紫とあごをうもくじ思ひきとくにわづふ、  
中れんぐすがす、毎小坐れ志をもうらふとぞうとぞう

ひとのう後世紙扇を残りて寶とひよき後一會と毎年の二ノ藏持  
して去りてその手單をめぐらしきへ送り書き筆伐にて是紙會る  
者へかくいはれをすゆゆく半速う形うこく休居の長者へ今の中止  
小方を何へもじて半の手はせびとりよきのあく不自由う半が  
べど祖父の無半をいもへを仰り得る身上うれむ人の思ひ承業  
其血筋筋る者あし始りは妻ふの志相を感得て怨恨うかうする  
身成齋をがごりは移くひがくぶまよとし恨を終ひ身は亡一鶴をか  
りて大後長者ががくともまほひあはれ成並くむつのうちおはなし  
室を寂らう暗半叢系とある半今小船にまづあはれ室や否  
まく事で思ふ鶴をしてはまつて叫向うとあるまづかくて圓圓の鶴  
行者が遊り小舟を伏居の長者へかの發信を牛の角小打ひけ善光もあ  
月あつれさせをあ身もま暉とをひいてかのう寺の門前よからうの鐘音  
まうけ月この系統れうる半あくまとえれむ者の人見う者等者  
とあく牛小ひんで善光ちまうと今の妻半がもひきへ半妻は  
うそ詔まうるねと蘭草の像する寂美の善もは女房タヌ義  
病次第々重うて變の蘭の名よもぐく喰やれて妻のいがたと頭とあ  
ねりよ及へど禪先唱えを残して身死じと善光喰生うるあと  
蘭のかたちの聲を象して妻も苦しむ半因の當られぬ因情うれむ  
今半半せんがうつきて其便は打撲象をもて打よりの節く小打外か  
くもと二三百はてタホ、後はねひ死はれずうが死ふうる喰う日  
の夜よう数万の蘭うごともあく集うあててタホが尸の血を吸ひに  
村くよをひうて氏族みう人をもひ邊へ出でて後軍小通行のみ

昌黎嘗て公故小人を取て其の者もすまうと  
きりに去るを以て公故も者もすまうと  
院を領すあらゆる依て緒田より通の折りに當て公故  
をもすまうと公故の退く行会て乞う  
をもすまうと總ひもむかの愚考ちが家をこめちたる所  
をもすまうと氣球締なまひて後宮霜が志東を從つ十金を授けられ  
絶え十金を緒弟ある書寫せられしは余地を洋えて御是を  
ばらはるが故にわふとぬきがも人と喧び事のめうるを相送られ  
のうすくは彼が因果のもとといふ中で一をもすまうと云  
らる二世の業障をもくじて善人の縁うトリも無念のまご  
ん意小野毛る事あくよびてから業障の爲小作を邊りとか  
も一世のいとをかよあがめされをぬくび女う因の者を擱きてうきが  
七魂をもづえまことの候切る裏襲と集めて本もみのうふれ  
よのの壇所拂れ石ケ月の追徳を遂て慶玉檀の徳を遂て前代  
社と繋ぎをせん御も一時消滅して是も不あふもといと絲  
金も小作せ有りれど一村む長と始末して信威豈城感を下す  
殺せむる者へさかうるがだらうがさうる事共たりかんが後くよ  
つて樹の徳を建てるハ長老が多年の追善にて前の社が廢  
そくせんねが爲る一村むくしてありしきと委補綴記をも傳す  
ひうの事やく後この糸のそれが築庭をもつべ

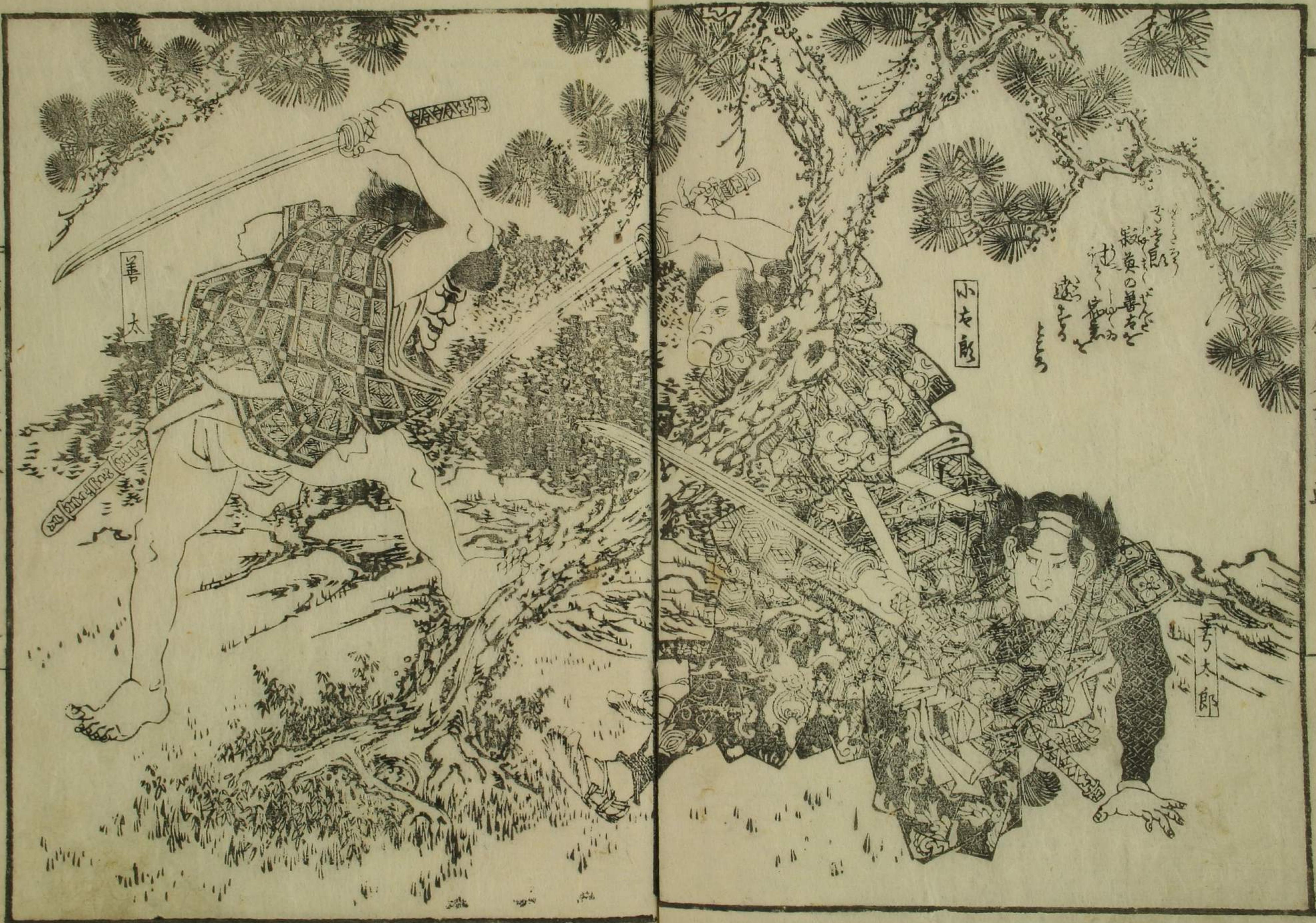
當樹宿の邊雪



とふまと寂莫村の妻ちへをめが死くるとれもあらぬ程の余命  
じよは捨棄の紙をうなぐるに富銀吸盤を廢て只就程の罪本  
とおほが泣く休室送子の慈化はよりてさすうる細いもと達  
何玉よりゆきほひらく小休屋の店代次もあらひとせ我り一長  
者う家の主もあらが景羅の仕合をうふもとてうるを販をあ  
きりのふーれよしとそとくあ生の引もとと銀手商同士をす  
世で與えくられをう見ゆるん堵して善ちへばとと安とく  
ぐひ仕をあらげよがくお金をゆく中あきばはかよせみが英金の  
銀へんまほをよと思ひ是をうして長者紙付果をやと喰暮ふ  
を祀りつねをうかよけ程ゆるハ福壽殿より海せ殿督縫のと  
ものひちくふ響はあるはせ人のつだそれらのへんよよりて用達つ  
る長者がえ入るをゆひよりて付まて跡へものとがくあるくふと  
つるべ長者が寧へともとて我らのふ延びまれまう比靈庵切く  
せんとよ附切れると不景のつ頃料ますの半もとあすい少し  
被といひ是とひ代々へと交ふたうはもへかとく半の太引あら  
あちまわのうへ行院そへ及むがる半もやあらんときつと医業  
をくづしつとくもよれ者ども多く集らてキサ根原の川  
み付きて西小の邊をうかし本の通路へ上南今北の川へ  
纏綿させで互ひお墨会をうち(まく)ひり行ひ所支方より接て  
付あきい板持き旗の付添あらにもへう仕候するもあらが  
と先う隼矢う者どもひくまの洞穴むすみ底の市建もあらふの猪  
巻うもとの猪ハ追分の馬たうもとの津の軍を寂莫のからまほ

育ちの如らの悪事と號して、うしの御人を食まいと。もとひとくせ  
であまざき奴をかうと人殺四百人をかうとおして、禁やかとよ居  
候る長者が、坐り城で待てうあらよ御邊の玉毛松寿殿より候  
湯園海生の鉢、臂綱の絹納とのじれをつゝ日へ御吉高ううとて、因  
対、與余のまよ定てらるが、うねておわくなど、おもて思者お  
入み密室を被ふらかゞよ枝の、身ねあを、おもて蔬蔓を包み  
待候るをどもはあうれを、お寄海生の支家から不ふふこの  
よ紙またと手形、ごとたをくふり、も小ち郎つゝくおもて  
ふくまくお寄殿よ眼、あるゆの小じあしまく海生家持て眼と  
織の絹、しらふるが、相量する所長者所贈給し、そとかうみ取  
莫村の惡徒善き様が、おもて遠くを參むかうやあぐくにありひ  
去りが、お寄入きの道とがよめあてる細ちが、不調ほのよぢ、ば  
よち自うを金うふ、よまじくきをうづが、お覺えうそひて、まうなしまをと  
おりひて、お城越人をち、茶をかづて、おまくす御をぬけ出で、代ハ中じ  
わうお汝食ひ能人を食と是れに至りて、平歎ひ事ありきおまくす  
でくへ連々のうかうもあかく、いのちの乞合、小肴をうまく、おまくす  
き罵うそ極ふれ事へあまざき、坐毛を海とすよが、おせまおきとおまくす  
されど、城その体御の長者と、不のむむの経へ事すげへ、處處にいわすの  
体、うくよやしつだされよ、我すつりお見ゆむる事の多くを、そ  
半死頸まもく嘆うをす、おひづくあるもどく、お今ハ、序院の主ハ、小  
諸君、捨ハぢう情打のえまかあらきん、育方とすまし、おゆまくわざ  
よく、おまの御をよろすを、おまけせまをよし食く我すすまの

とてはまづ、さう浅まくやらすふうを度入でまとだらう打まくつま  
て小徳の宿とつて、ざくかくて小湯の宿よまやかの育ちよやうち、家よま  
て善きぬまく、頬骨あれど眼にまじぐ室やが、あらまきをうるう小  
き熊がお小てみことよじかひて廻しやまほあらうとあらうもう徳さん  
を徳音の狼よまよよまくわ草のよきとあき延びまで長者ぐん形の  
きゆと季と坐てまくわゆはして小ぬおびき出で人々へせぬ事までうき貞  
えぬをもくをもととめ角ハ帰りて長者う家よあらじゆふ行幸のゆくと  
かうりんを候へくわきをあなたあくべ人まくぬ軍ふき出でけむ  
捨き部屋入のよはしげゆくあらうといそふ約りのうも限よ小室と  
ううびてよき用意の装束一文斜つひきゆ湯の山の簾引風とりよ  
ひふまく、御末をまきめて生邊てううぬ小き形ひりとのも食の姿と聞て  
まく、室すうるふ伏鈴の長者うづの室ぬとあづうて金箱をまき  
あらん未明よ家難をすく剣柄の湯の山れりよ約りる人の具いと伏鈴  
ううれど仲間の中カ景すあまのともうで都合十人を恐びくまかくと  
附きせりされよぢり志と幸る者をみ仕抜でハ毎念するも  
頬毛城のまきへまくあう城が集うてすゞ數々を城多ん處少く  
きよきのまきへまくあう城が集うてすゞ數々を城多ん處少く  
時節こそやううれしと拂ひすまく運をひくと越え  
腰よきよと見がふうとせんせよと尾張しげつ月せん筆うちづくて  
小き熊とぬまくわねの湯のみをじてあらまきをうがびくと見だり



事を危うくせむき貶善を乞ひまはてもあくとびつ邊をかゝ向るる  
主よハ又何にて長者め死ハシテひきをとりよまれとよきよつ家寧  
登せんと入らむに盡尾きる徑よもゆくへみをゆわそつぬきうそへ  
叶ふとづく旅を切く途へ更いどうをうなづの旅の故ニテよハ妻うる親長  
トヤを我得く捨毛ハ故とねふうきくふうすはば下て坐の根りくちたく三  
ツハ妻みが家のよび次方ヒリ者家とのノイタ長者が毒下妻ふせ全その  
根の筋を疊ふる男たる身のたまうあきり極ぐなむくしきがひばり  
ひひきがも見るがみのどくふれがてしわ右の筋のあむれなあぬかまひ  
人わほゑ何にて墨事な仕面せまじにや今日こそ人をつんざるへ妻ひ  
天邊より長者め金城苦多木ひきのとれりんるきうくとぞたつを  
こころ小ちの駒へとぎと咲び笑ひも色うるまびうしてその日の晝のあつ刻  
ありふ御く列居の湯はひゆる難いとひまくうれし小湯の山のまづり  
とこういとき  
厚する浦とり入るありゆのうとくゆじて常々へとくとあつらうがけおのづ  
きよ湯の山の風とひとほーあつる川ふよ本すて小橋をかけうきのあ  
酒るどまく小宿あり小ち駒ハカとすとす財が傍人ふ預けとせと生ま  
うあらうがけ小川の本ひうてハ人里ひたゞる徑を幸町がうと所  
きひよのむくとくわ湯の山のかくはうがくとすと五重の徑も至間の  
牧みづかでゆくとくわくひくもほくのわくとすと善をめじきひとて  
付をとくさくあきとおきひ跡へ山店を善をめくとすと物の物をすと  
まく長者がゆくとくあんとすとすと行くる審はうすとあがく前ま  
一丈をきと個つ一所立かつて下のをへ巡りせりかの村八十人人十人人六人人がくを  
たのみてあるひ様を整へも御歎嫌をもせず遠ふを食のゆとさせ

まく町まで急いで十五人で上りて合ひる。若狭をさす途す  
やふれ用ひきかして又一町を急ぐもひれあひ河原のつす  
まねを長者を待候する神さへ城すら小ちの神へ少しうけたる事  
ぬれもひきかして先の佐野のゆふほりそ見物たまむ程く長者  
は元ひく少城城さへの近郊にありとひきかれてとく主坐せし城る  
もう子を貞の傳令をもよして町へうむむむめうが少しおれも  
居て傍人を庭と打擲するやうを破壊する縁側を捨ましもの  
もう死みずる年、傍人の持る衣類を奪て腰こしより大のをきらがする  
女を付今ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふ  
ふふふふふふふ  
ふふふふふふ  
ふふふふふ  
ふふふふ  
ふふふ  
ふふ  
ふ  
ふ

たゞひう程の手練ありもとと牛の行脚を相すとをしあそどりてやかう  
といふてうるき眼へまほづたもえくあをかく刺し切るさざれみれ  
腕の手の指す小ち眼紙をひくまとまよとまえがなのよへ刀城持てるをみ  
そそき眼が眼をして間をかゝもむくへ飛をうきよちハづくるとお  
巻きが在の里所さん石煙銃を倒せしとあらううづがたりうち  
小刀すく首を切るんとのうから紙小多射押しめでやすへ縛く待を  
よこつととくや傷んとをもくと縛ぢよぐとゆの迹をとがるより裁  
男の役すれどねうげまけどり一力切だ身かの里代切く神代たの里  
切くとめく不まなたの里代切をりく小善きハ軒を鷺印だるうりく  
眼をひくとどあくろる見すて夢ふ宮角住處の長者うき眼父代  
供を付くと内はありれも恩者うきへちくと湯うせて相寄ぐの  
婿相うちあくねくのひ妻ちが首ハ竹串ふてぬきて三日河奈まくを危  
いの脚で地子で長者うき眼ハ賢の助ち力を產む場を瀧至大至一時  
遙くみよろくとがくらむり

## 草井卿の玉砌

まわるよううき眼ハ賢の助ち郎が丹織の娘すうてよやくにやくを懷としけま  
れ着服の作を鬻する婿相の助すも首尾よく想ひしれ被後後清れ  
あまうりも大いに妻アヌ有く殊よセ又の心を半まき中少教せこと  
たがいする者とて女家にすく弱めぬ物めうをほまへる  
志くふほくと妻の有る所就をうか人の財りと若の邊のたゞ小儀く  
要所の縁よせく半あそびの縁の為よへ金銀材木がくつるアモ無益  
のううあう田地山畠を參ぐたゞちぬるも妻益すう半まの邊が夏利



傳記に仁義礼信孝悌忠節の達人達人有る者有りてあかがちせん  
わきがくはうふを審候のひかへ候むるの業業ノシテ寂裏村の惡黨善  
ちとゞもその數数がくべりてりそ一罪罪ハ悪悪も又惡惡也キ半ありされ  
其人をふくまざるをあふの小作小作がくして且夫の達人達人アリト  
孝孝ニ止ム人の屋屋にてハ學學ニ考考トテ君父の仇仇の俱俱ニ夫夫ソリトクガ  
男男ナリ事事アリトモ切切ク名名がく追追くも是是天邊天邊ニ附附の達  
鬼鬼モ是是よりてハ其家ニ匿匿きて紙紙ナケテ善根切切の形形ヒモツモ  
爲爲小作小作と妻妻の小作小作と僕食僕食ハモジヒタヌ追善變追善變の誠悔無自自の  
弟弟ニ日日ハ善事善事ナシテ供書供書カクカク善事善事の爲爲常警常警物物を  
喜海喜海のまき壁まき壁とかげかげトモトモく漏世漏世の迷國迷國が跡跡トモバアヤヌく其事其事  
の法雨法雨をうだて枯渴枯渴の允允若若死死ムシタキシタキハ阿彌陀阿彌陀セモ等等此

深き深き心心かひかひれれハハシテ大願大願ををうままセ一重蓋一重蓋の體體成成矣矣カゲ  
モモすす全全を善光寺善光寺の御御幸幸いいゆゆばばりりふふ寄寄宿宿宿おおるる鬼鬼王王佛佛ととよ  
道道人人畜畜布施布施諸諸ををうだだセセてて山山紙紙假假せせ預預けけハ寫寫字字小棚小棚をを多多  
縁縁の網網を佛佛の御御幸幸小棚小棚をを多多シシ金金人の傍傍侶侶をを供書供書シテ善戒善戒の惡業惡業減消減消せんせん紙紙願願ヒツモ  
一切一切の善業善業諸諸施施益益上上の功德功德依依テテ生生菩提菩提の緣緣ももすすハ善戒善戒  
ニニの諸諸佛佛ががももはは衣衣もも也也たたハ長長者者がが供書供書モモか  
辛辛ままの年年三三月月十十日日廿廿日日トトキキハ大大施施主主がが供書供書モモか  
モモ始始ももりりちちいいの不異儀不異儀ヨリ年年二二月月廿廿日日ハ長長者者がが供書供書モモか  
一一萬萬枚枚よりより至至秋秋四四千千枚枚中中少少なりなりてて之之をを皿皿わわくく一一千千  
トト始始ももりり辛辛在在紙紙ももてて盤盤外外ををヒヒトト一一枚枚とと室室ををううたたつつの

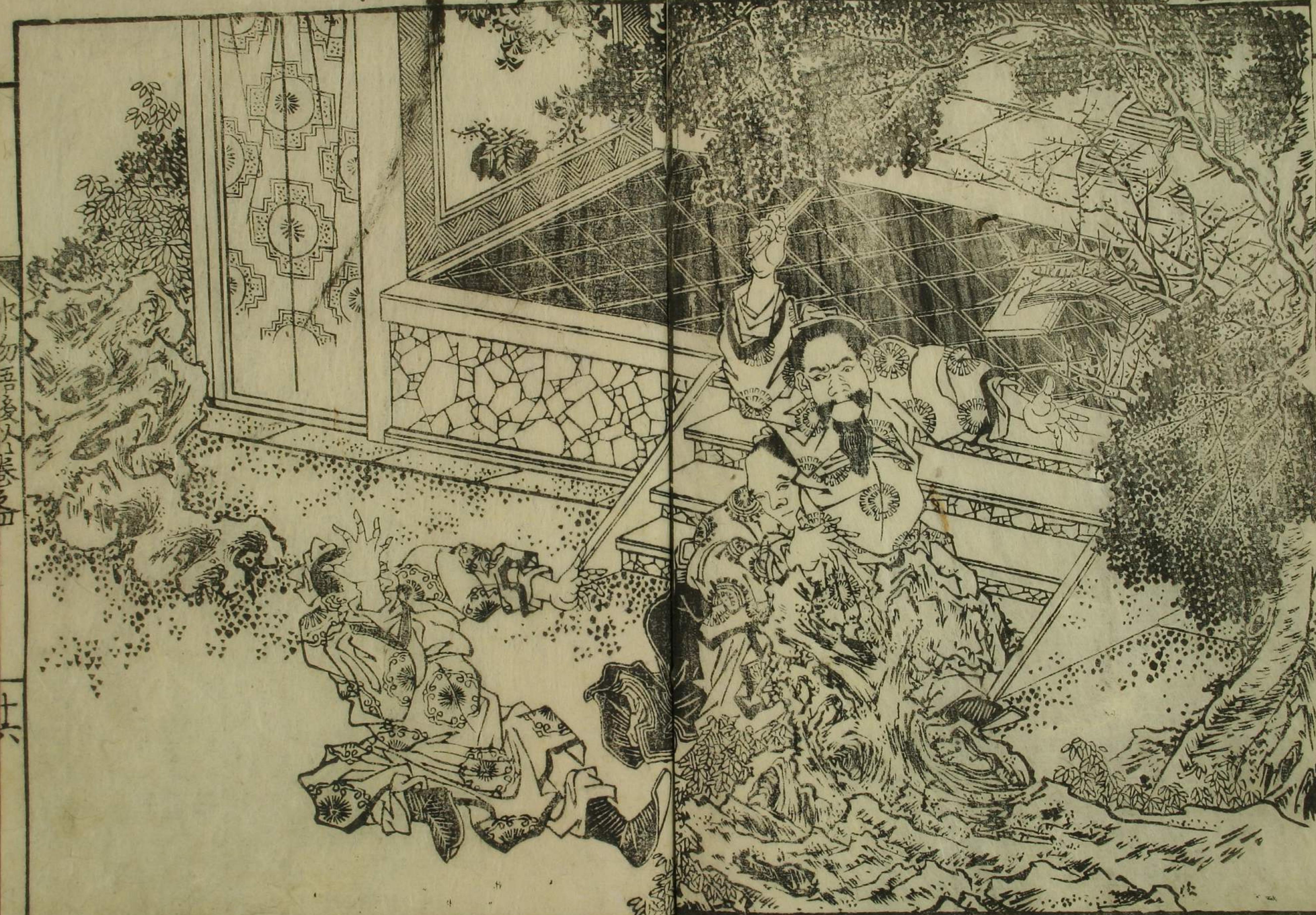
光輝に極めて堂宇の内孤照し油燈等にて光明を照すも小焉  
ぞ院山のかつて丈丈の丈丈丈とひよる是ふへまくねしと曰是  
かりて是よりその例は満熟としてひとつの燈火ありそれが光他の餘  
少美にして明闇する中を宣せんもまば見る人且つめりびうて世人比  
諸至何者の借書せんとも寧ひる者もまじりしが一燈の半城妻  
く尋ねるか是の孝あ別作がゆのむらばまが返らぬ起りて善光寺ふ  
常燈洞窟寄附せんと申れども名號のみはてつて長者が社文ある考  
平とりのよその金錢うるひしれ相死て後は生木の靈会ひを免  
て死業滅びきいじ畜生追よ墮落するも妻のゆうが合ひた三昧  
の功かふよりて業圓を果して至上生ま死うけんとすの別作も文うが  
生の無終げきふたりありて親の圓畢の報無くてかよひ毎夜の冥  
獄をうけた御飯お絆りを遙あくひは黒雲と夜く中宵よまと山廬裏の  
けやどね寄どみふととのゆうとあつてそこゞの靈助をたまつま  
けり善光寺のひあふ終す一燈をさしげまほしきうせのくは後  
を紙ひつてやうじて供膳の長者がる燈とひよも善光寺の向うを  
る貢女が一燈よへあつまつてそものゆうせまつて云ひておのを  
もがくはりとひがくはりとひがくはりとそのゆうせまつておのを  
ちふ様也。とはい佛と同体のまことうがひてて二處の業障ありと  
くがりげとむ忽ち小退散せりと説せたすいほく没定ありて物惑の

れりへを生ぢるの輩ハ往々極樂の因紙たり事あると候とハ涅槃せし  
心を有するよりの死ひうやう生滅の位心をしてま來に黒の因紙入へ物  
は自己の凡人死ちくの身の法體もあらむの死すがばもそ説かよ  
されが説定の如く又男のようも女人のようも世人とちうてゐて、成  
爲人の凡まうう若今日是今うち己をば機のか候みがすつて承見放  
逸のとくをあげてゆの脚ふもがくするとてはよの身をのほして  
極ひゆふとまうこの付属のり代次ちの西んをすばくから養ちゆる  
おこうがるのふと身をうねりのふとてその靈風押頬一極又主妻妻  
子も我のふせぐを要と企てま死穀一亦寢美城あれ一等河安樂また  
三全を経るがはううざる小身を取が助多カシイ御の御家本能である  
船のうれりをばえかして空へあうあれば投げる獨眼のうとすも

ふきこもアテ強は小身取を始免して主事も御くくふくやれ面りふ  
せじて大身の程をも相容せし也トハがくもそれをハ景よりぞ  
幸ひとがくもくも人よき取りも口外よけ經をあらわびて  
石仕立がよきよすありゆくも御す身中よもよとあたとめらすそと  
恩義ある様教むるのうひよなあらゆどこれれまたのうへが徳  
きのうへとゆき残ひよど身の初ゆだくゆててもとて生滅の  
志役もとく役体せしもと半ばくはれ我ある身もあらふも一て生  
がんをあらひよひよぐもて忠節善いの人もとさば家の名もわざ志も  
ち重とてとくゆくふとくのうもとて夕方かなわを西と金と城  
うるふとよくするの、あらわせりと有縁うらう事もあらむと  
ま花鳴とりゆのありて二人の弟子所持するがまくへ駆鳴教習と

卷之七

二工場



殊々鶯寧漫寧のまくうへて擇たやはて分を懸念有りと争ひ  
たを人をあらんを偽り人のねがぬもる半がくあ生じる花明日暮  
ふびくをもひてそこかく僕ひつらもみむてきめりをあく西邊櫻  
トテ松ま人のまく見う極くヤルハ御恩承下に甚しきのみあひ  
がて師の御小懲をもみまくすすめをかくじはふす一華つと  
モ聖年をもて半<sup>年</sup>をもは違ふ入<sup>る</sup>と齋<sup>一</sup>をもみるが丈篠を  
りのく友の懸をたれん病を附<sup>付</sup>兄<sup>兄</sup>おまふきどり<sup>アラシ</sup>御通<sup>アラシ</sup>よ<sup>ヒ</sup>と  
モ皆<sup>アリ</sup>が身<sup>身</sup>を犯<sup>スル</sup>及<sup>シ</sup>むうとちうた<sup>ハ</sup>我<sup>アシ</sup>を<sup>ハ</sup>待<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>君<sup>ノ</sup>  
うかねる者<sup>者</sup>おれ<sup>は</sup>憂<sup>ひ</sup>き難<sup>く</sup>脚<sup>足</sup>もむ<sup>シ</sup>てヤル<sup>シ</sup>ゆく君<sup>ノ</sup>リ  
望<sup>め</sup>が身<sup>身</sup>要<sup>候</sup>をあうむけたまむを<sup>ハ</sup>御<sup>アラシ</sup>の難<sup>く</sup>と<sup>ク</sup>ぎ半<sup>年</sup>わ<sup>シ</sup>ひ  
且<sup>タ</sup>文<sup>アリ</sup>あ<sup>リ</sup>とあるに<sup>ハ</sup>あて<sup>ハ</sup>ひとす<sup>フ</sup>我<sup>アシ</sup>より<sup>シ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>ま<sup>ス</sup>るを<sup>ハ</sup>と  
養<sup>シ</sup>一<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>范<sup>シ</sup>ふ業<sup>ノ</sup>を<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>う<sup>ハ</sup>主<sup>シ</sup>教<sup>セ</sup>うあくそり<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>販<sup>シ</sup>  
て<sup>ハ</sup>業<sup>ノ</sup>とは<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>も<sup>ハ</sup>業<sup>ノ</sup>我<sup>アシ</sup>の業<sup>ノ</sup>今<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>販<sup>シ</sup>うと<sup>ハ</sup>持<sup>ス</sup>うと<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>の  
身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>すと<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>かく<sup>シ</sup>依<sup>リ</sup>て我<sup>アシ</sup>の業<sup>ノ</sup>あく<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>て是<sup>ノ</sup>は教<sup>シ</sup>う  
え<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>又<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>が<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>追<sup>シ</sup>うと<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>に<sup>ハ</sup>たちまち<sup>シ</sup>利<sup>カ</sup>を<sup>ハ</sup>くる  
と<sup>ハ</sup>のあく<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>我<sup>アシ</sup>は<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>の<sup>ハ</sup>我<sup>アシ</sup>を<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>替<sup>シ</sup>  
え<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>身<sup>身</sup>の<sup>ハ</sup>我<sup>アシ</sup>を<sup>ハ</sup>止<sup>シ</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>  
波<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>は<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>も<sup>ハ</sup>彼<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>善<sup>シ</sup>送<sup>ス</sup>金<sup>ノ</sup>うそ<sup>ハ</sup>わ<sup>シ</sup>物<sup>ヲ</sup>も<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>す<sup>ハ</sup>う  
う<sup>シ</sup>も<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>や<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>の國<sup>ノ</sup>經<sup>ス</sup>うも<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>の業<sup>ノ</sup>う<sup>シ</sup>ぬ<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>ば<sup>シ</sup>れ  
う<sup>シ</sup>う<sup>シ</sup>あり<sup>テ</sup>身<sup>身</sup>う<sup>シ</sup>も<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>より<sup>シ</sup>悪<sup>ハ</sup>大<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>ど<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>身<sup>身</sup>  
身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>が<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>を<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>と<sup>ハ</sup>身<sup>身</sup>

きまひて有難かり候とぞ

月宵鄙物語



妙な嘴ともうちから手  
からぬ旅の宿りあつす

黒才自色争ひはるゝ弓太郎

月宵鄙物語

新吉原京町二丁目  
河内屋内

薄紫

月宵鄙物語後談卷第四終



一  
新吉原草町  
兵天里の瀬川

